

メキシコ大学院大学

El Colegio de México

メキシコ大学院大学(通称 Colegio)の貴重書書庫へ太田エレナ教授(Dra. Maria Elena Ota Mishima)に導かれた。焦茶色のずっしりした厚紙ボックスが13並んでいる。

日系移民資料収集のための基礎調査ということで、トロント—オタワ—メキシコ・シティ—ロサンゼルス—サンフランシスコ—バンクーバー—ヴィクトリア—バンクーバー—成田を一ヵ月で一巡する日程も半ばに近づいていた。カナダ、メキシコの国立公文書館、外務省資料館に受入国側の公的文書が相当量収蔵されていることなども判っていたが、日系人側の資料としてはこの13ボックスがハイライトになりそうな予感がした。

メキシコへの移民といえば、まず1897年(明治30年)の榎本植民ということになる。この榎本植民地が3年程で解体した後、三河出身者3名、奥州出身者3名が三奥組合を組織し、これが1906年の日墨協働会社へと発展してゆく。農場、薬店、雑貨店、染物工場から発電所まで経営しつつ、必要に迫られて「西日辞典」の編纂を企てるという苦闘のなかで、「協働」による共同体建設の夢を追ったものであった。「私有財産ヲ所持スルヲ許サズ」等の規定をもつ三奥組合同規約を評して、吉野作造が「どうやら五十年進み過ぎてゐる」と嘆声をもらした、と伝えられる。(松田英二『南メキシコに遺された日本人の足跡』この流れを終始リードし



たのが照井亮次郎である。

三奥組合—日墨協働会社関係資料は、6名のメンバーの一人有馬六太郎の女婿にあたる新実清一氏の手許にあったが、今、Colegioの書架に収まっている。

太田教授、留学生K君と三人でボックスをひとつずつ開いてゆく。手紙、覚書、年次総会記録、申請書、契約書、出納簿など日本語、スペイン語の手書き資料。大切に保管されてきたことを思わせるが、年月による傷みは進んでいる。

この前々日、日墨会館別棟書庫で見た、『にちばく』(新聞)主幹荻野正蔵氏収集資料中の照井亮次郎事跡資料大バインダー1本とあわせて、メキシコ初期日系移民史を語る根本資料である。

これらの資料を当館がマイクロ・フィルムに収め、それを東京、メキシコ・シティの両地に置くという考え方に、荻野さんも、太田さんも賛成された。実現にまで至れば資料そのもののためにもよいことであろう。(1987.11.18訪問)

(特別資料課 野村 稔)